

キャベツの栽培法

2011/10/10

日本種苗協会長崎県支部/市川種苗店

※一部又は全部の引用を禁止いたします

タネまき

浅い木箱や市販の育苗箱に水はけの良い清潔な培土(市販の種まき専用土が便利)を入れ、表面をならして5~8cmの間隔ですじまき覆土をします。乾かないように不織布(日本手ぬぐい、さらし布、ガーゼなどでも可)などをかぶせる。灌水はこの被覆の上から行うと表土が硬くならず便利である。タネまき後3~4日で発芽するので直ちに被覆をとり、子葉展開の頃から本葉が見え始める頃の間、1~2回密生部を間引き、株間を1~2cmとする。

仮植

本葉2枚の頃に12cmX12cmの間隔で仮植する。(以前は図のような仮植床であったが現在はポリ鉢が多く用いられる)9cm径のポリ鉢に床土を入れて仮植しておく、定植の際に植えいたみがなく便利である。

植えつけ

本畑の土作りは通気性保水性のある肥沃な土がよく、植えつけの間隔は、うね巾60~90cm株間40~50cmが標準である。苗の定植適期は本葉5~6枚頃(夏秋栽培の適期で播種後1月位)である。

施肥※(以下の具体例参照)

元肥には1㎡あたり、堆肥1~2kg、苦土石灰100gを施し窒素、リン酸、カリは成分量※で10g、20g、10g程度を施す。追肥には結球開始期までに2回に分けて合計で窒素、カリ共に10g位が適当である。その他、中耕は適宜にまた、収穫は適期にすることで、一番外側の結球葉がそり始める頃である(夏秋栽培の適期で定植後2~2.5ヶ月)。

※肥料設計の具体例

中学校に戻って考えれば簡単です。

実際に計算してみます。N:P:K=10:20:10だから、 $10\text{g}/\text{m}^2 = 10 \times 1000\text{g}/1000\text{m}^2 = 10\text{Kg}/10\text{a}$

8:8:8の肥料を使うとすれば窒素成分だけで考えると、成分で10Kgなら8:8:8の肥料は

8%の窒素を含むのだから、肥料全体では

$10\text{Kg}/0.08 = 125\text{Kg} = 20\text{Kg}/\text{俵}/10\text{a}$ で6.25俵必要。

一方、単位面積当たりで考えると、

$(10\text{Kg}/0.08)/1000\text{m}^2 = 0.125\text{Kg}/\text{m}^2 = 125\text{g}/\text{m}^2$ となる。

しかし、リン酸分が10g/㎡程度不足するので、これを過リン酸石灰(0:17:0)で補うとすれば8%の約2倍のリン酸を含むので125gの約半分

$125/(17/8) = 58.8 \approx 60\text{g}$ 程度足してやればよい。

